



研究代表者  
**新福 洋子**  
広島大学大学院  
医系科学研究科教授

(撮影：サイエンスポータル)

参加研究者

氏 名	所属・役職
新福 洋子 (研究代表者)	広島大学大学院医系科学研究科教授
隠岐 さや香	東京大学大学院教育学研究科教授
狩野 光伸	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授
近藤 康久	総合地球環境学研究所研究教育部教授
坂元 晴香	東京女子医科大学医学部准教授
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター准教授

研究目的と方法

人類は現在、気候変動や感染症、紛争といった世界規模の惨事を抱えている。グローバルには、その影響を直接的に受ける人、間接的に受ける人、影響を受けにくい人がある。感染症を例に取ると、ワクチンの世界的な分配の不平等は、健康格差に加え、渡航の可否にも渡り、機会の損失という不平等を生み出した。しかし感染症は一部でも残ればそこから変異する可能性も残され、残りの人類にも不幸な未来を生み出しかねない。人類の未来と幸福のためには、科学技術から得られる恩恵を、グローバルに公正に分配する仕組みが必要である。本プロジェクトの目的は、分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと、その達成に向けて科学者はどのような役割を担うかを検討することである。

研究方法

- チームビルディング：参加メンバーによるオンライン会合によって、テーマに関し感じている課題を共有し、以後の研究活動について合意を得る。
- 文献調査：分配的正義、科学ディアスポラ、科学技術外

# グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと科学者の役割を検討し、未来に続く若手世代がそうした議論に参加し、国際的な活動のスキルを向上するために、分野横断的な若手～中堅の研究者のネットワークを形成する。分配的正義に関する最近の動向を、文献、国際会議の参加者からの聞き取りによる調査や国際会議に合わせてイベントを組み、議論を展開する。それらの議論の結果を積み上げ、論文として発表する。

- 交、特に現存する国際団体の役割に関する最近の動向を文献や国際団体の委員からの聞き取りによって調査する。
- 国際会議での議論：参加メンバーとの議論によって抄録をまとめ、国際会議にアジェンダを提出する（GYA総会・学会、WSF等を想定）。
  - 論文執筆：参加メンバーで議論した内容をまとめ、論文化する。

2023年度の具体的取組と実績

2023年11月14日 第1回会議

研究の目的と概要、今後の活動についてディスカッションを行った。

文献検討について、Distributive justice, Social justiceなどが、サイエンスの科学政策、ガイドライン周りで見られるようになっており、どういうものが価値観として提案されているのかは整理した方がよい。そのような観点について国際的で議論が行われている中、日本が議論に入れていないのは厳しい。Justiceを用いた表現（environmental justiceなど）は多数存在する。日本が議論に入るために、どういうものが世界でも議論されているか？を調べる必要がある。そうすると必然的に科学をめぐる格差の話に習熟できる。それがWHO健康格差の話とも直結し、さらに気候やサステナブル、環境負荷の話とも直結し、正義という言葉の中で数珠繋ぎになっている。その部分の構造を私たちが説明できるようにならないといけない。そういう議論のまとめのようなものについて、国内で政策関係者が読めるものがない。こちらでそれを書くことが、政策側への打ち込みやコラボの仕方としてはやりやすいのではないかと。

コロナの蔓延後より、ワクチンの公平なアクセスに関して議論が続いている。今まで、ラストワンマイルの人にどのようにワクチンを届けるか？という議論をしてきた。コミュニティになんとしても届けようとしていた。しかし、それについて環境負荷を

かけないで出来るか？という議論も出て、環境セクターとヘルスセクターと対立気味になっており解がない。あらゆる制約があるなかで、どう公平性を達成するかは誰も答えを持ち合わせていない。

気候変動関連の専門家のチームに入ってもらう方がよいとの提案から、鹿嶋小緒里氏（広島大学、プラネタリーヘルス専門）にヒアリングを行うことになった。

2023年12月5日 第2回会議(鹿嶋小緒里氏ヒアリング)

鹿嶋小緒里氏よりプラネタリーヘルスについて、その概念、The planetary boundaries、Climate justice、広島プラネタリーヘルス宣言2023、「プラネタリーヘルシーエイジング指標（PHA Index：PHAI）」の開発について情報提供をいただき、メンバーとディスカッションを行った。

特に質疑の中心になったPHAIの開発に関して、鹿嶋氏は健康、自然生態系システム、ソーシャルシステムに関してどのような指標を集めるかということに取り組んでいる。既存の指標を組み合わせるだけでなく、地域に即した地域の指標を集めることも必要である。測定に関して、どちらかというとポジティブ思考のものを測定したいと考えているが、それだけでは足りないものも測定しないといけない。それをソーシャルバウンダリーという形で入れていて、明らかに不足しているところは頑張っ取り組んでいこうという形で共有していければと考えている。

PHAIに関して、ソーシャルバウンダリーを決めてそれに足りないものがあつた時に、このプロジェクトではどこに働きかけて改善を行っていく予定か、が問われ、足りない部分に関しては行政の仕組みも重要になってくるので、行政にまずはアプローチをしていきたいとあつた。何で足りないのかは科学者で突き止められる。それに対して、どうしたいのか？という部分は、住民の方がどういった街づくりをしたいかということと関係してくる。様々なセクターの方との共創の場にこのツールを使ってもらえたらよいのではないかという議論から、住民や行政との共想の重要性が浮かび上がった。

2024年3月 第3回会議(神原咲子氏ヒアリング)

メンバーから提案のあつた神原咲子氏からヒアリングを行った。

神原氏も科学研究が現実の社会で十分に活用されていないことへの問題意識があり、この問題に対応するためには、科学の成果の分配について考える際、科学の普及だけでなく市民自身が科学活動に参加することの重要性を認識する必要がある。研究者が単に市民になるのではなく、市民自らが積極的に科学研究に参画し、研究者と市民が共同で研究チームを形成することが理想的である。しかし、市民が科学に参加する際には、モチベーションの欠如や必要な知識の不足などの問題や、研究者と同等の活動を行うことは現実的ではない場合もある。これらの課題に対処するための仕組みを構築することが必要である。また、合意形成の方法が変化してきたことで、研究のあり方や倫理の取り扱いも変わりつつある。科学倫理の観点からも、各分野での倫理観の差異が社会に影響を及ぼす際の変化を考慮する必要がある。

神原氏の災害看護における経験から、災害に関する研究のニーズとファンディングのギャップなどが議論された。短期・中期・長期といった時間軸で見た際、調査災害は初期に来て後でいなくなるとかあるが、今まさに起きている語り、長期の復興の中で見えてくる話に関わる研究者が限られていたり、ファンディング側からは、旬が過ぎたと思われがちで研究費が出ない、短・中・長期の時間スケールで見えていかないといけない。また、空間に関しては、国家間の差、地域の中でも支援に来てくれる・来てくれない所など空間スケールで全然違った層が見えてくるところがある。そして、そこにマイノリティー差別など、アクターの属性による格差のようなものがあり、少なくともこの3軸（時間軸、空間軸、社会的属性）で研究者が入る入らないといった話も考えないと、実像の重なりあっているところは多くあるが、その解像度がよく見えてこない話が多いんだなと改めて感じながら話を聞いていた。このプロジェクトでも、何かの事例を通して、この3軸で整理してみるだけで、見え方が全然変わってくるのではないかと。

文献検討と論文執筆

Distributive Justice, Health Justice, Environmental Justiceについて先行研究のレビューを行い、AAASからのコールに合わせて1000文字の抄録を執筆した。不採択も、ISCよりHigh-level Political Forum (HLPF) のポジションペーパーの事例を提出するコールがあり、一部を提供したところ、ポジションペーパーに入ることとなった。

今後の課題・期待される効果

- ・3回目の会議で提案された、事例の時間軸、空間軸、社会的属性での検討を行い、分配的正義を実践するための枠組みについて理解を深める。事例は国際的な大きな事象と、ローカルな事象とを考えてみたい。
- ・2024年11月世界災害看護学会での企画セッションへの登壇を計画している。その他にも国際的な大きなイベントがあつた際に、対応する。その際には研究メンバーに限らず広く若手研究者を巻き込むようにする。
- ・文献検討から書き始めているペーパーを書き上げ、国際ジャーナルに提出する。すでにパナマとナミビアの研究者に共著に入ってもらっており、内容によっては更なる協力者を募る。